

平成24年7月8日

空手道で一番苦しかった事

西東京本部 浜田山支部
島山 翔大

私は、月心会空手を市川教士の下でお世話になり始めてから7年間続けている。

中学一年の時に、少年初段受検をしているので、今回は一般初段というランクへの変更、つまり二回目の初段受検となる。

今迄も苦しい時は沢山あったが、その中でも二回大きな苦しみを味わった。その事をこの作文に書き留めたいと思う。

私が最初に味わった苦しみは、小学五年生の時に起こした右鎖骨の骨折の時であった。きっかけは自分の不注意によるものだったが、骨折した当初は、起き上がる事も出来ないくらい痛かった。勿論、空手は出来ない所以道場の隅で見学をしていた。でも、その間はかなり苦しかった。皆が己の為に練習していても、自分だけ体が思うように動かさない、そして何よりも辛かったのが、他の練習生からの心配の言葉だった。「大丈夫？」や「辛いよね。」等の言葉を沢山もらった。しかし、その時の自分はとてもネガティブになっていて心の中では「どうせ、そんな事思っていないだろ。翔大は骨折しているから、今の内にさっさと進んでしまおう。」と聞こえてしまった。そして、どんどん自分の心に傷を付けてしまったのである。この事が、今でも悪い記憶として頭に残っているのである。

二つ目に苦しかったのは、高校受験も終わり、やっと空手を再開し始めようとした時期であった。気が付かない内に、他の練習生がかなり成長していたのである。この事自体はかなり嬉しかった。しかし八か月も空手が出来なかった自分にとって、その型や技が上手になった練習生に追いつくのはかなり大変な事だった。八か月も勉強の為に空手の練習時間も削っていたので、再開した当初は方や技を殆ど思い出せず、しまいには茶帯や紫帯の練習生にも教えてもらっている自分がいた。

その時は「自分は下の級の人より下手なんだ、自分は落ちこぼれなんだ」という劣等感を感じていた。そして何よりも苦しかったのは、ある子供に言われた一言だった。

「どうして黒帯なのに出来ない型があるの？」という一言だった。私はこの言葉を聞いた時、これまで味わった事のない恥ずかしさを感じた。

今は全てを思い出し、この昇段審査を受検出来るに至った。あの苦しい一言は今でも忘れられない。

この先、空手を続けていてもこの作文に書き記した二つの苦しみは、忘れないだろう。でもこれからは、重い苦しみを味わないように益々空手にも精進していき、逆に忘れられない喜びや楽しみを沢山作っていかれたらと思っている。そして今度は様々な人へ自身の感謝の気持ちを伝えると共に、家族や友達、市川教士等の皆様に対し、沢山の感謝の気持ちの恩返しをしていきたいと思っています。